朝日新聞
DIGITAL

ログイン前の続きから読む

（今こそ！見たい）プロ野球、往年の名投手　独自の投法、道を開いた

会員記事

2021年2月27日 3時30分

読者のRanking		
1	野茂英雄	541票
2	金田正一	539
3	江夏豊	521
4	沢村栄治	434
5	稲尾和久	432
6	村田兆治	375
7	星野仙一	340
8	村山実	331
9	山田久志	300
10	スタルヒン	234

読者のRanking

プロ野球もいよいよあと約1カ月で開幕。大リーグから田中将大が日本球界に戻り、盛り上がることは間違いないでしょう。ただ最近は、昔のような個性的な投手が少なくなったような気がします。独特の投法で闘志をむき出しに投げる投手などです。あなたにとって、往年の名投手は？

ここから続き

トップ10は、さすがそうそうたる顔ぶれだ。その中で見事1位に輝いたのは、近鉄やメジャーリーグで活躍した野茂英雄だ。言わずと知れた日本プロ野球選手の大リーグへの道を切り開いた人だ。近鉄時代は沢村賞を受賞、日米通算201勝、メジャーでも2回ノーヒットノーランを成し遂げた。

「四面楚歌（そか）のなか、退路を断って渡米した野茂投手。その後の活躍ぶりは、記憶に新しい。日本の野球人に道を開いた先駆者として尊敬してやみません」（東京、64歳女性）、「人と違う投球フォームをもって、アメリカに乗り込み外国人選手をきりきり舞いさせた。その後もクラブチームを設立し応援したその生き様は、人間として立派です」（兵庫、79歳女性）。

僅差（きんさ）で2位の金田正一。前人未到の400勝を達成、4490奪三振の記録も持つ。国鉄から巨人に移籍、V9に貢献した。埼玉の男性（73）は「ゆったりとしたフォームから投げる、グッと曲がるカーブはすごかった。カーブと直球が主な球種だったと思うが、それで400勝を達成したのは、並外れた努力をしていたのだろう」と感心する。

＊

3位の江夏豊。阪神から南海、広島などと渡り活躍した。オールスター9連続奪三振や、広島時代の近鉄との日本シリーズでの「江夏の21球」などの伝説とともに語られることが多い。

「中学のころプロ野球にハマり、野球雑誌で江夏を知った。ちょっと悪そうな風貌（ふうぼう）と体形や態度が新鮮だった」（東京、54歳女性）などの声があった。

トップ10のなかで目立つのが、独特の投法をする投手たちだ。1位野茂のトルネード投法のほか、6位村田兆治（ロッテ）のマサカリ投法、8位村山実（阪神）のザトペック投法などだ。最近の投手では、そういう独特の投法をする人はあまり見なくなったような気がする。

「村田は、ご本人の気質と合わせ、もう職人技としか言いようのない投手だったと思う」（奈良、50歳女性）、「村山の必死の形相での投球は、子ども心にも鬼気迫るものを感じた。1対0で負けるのを見ると、こちらも泣けてきた」（大阪、63歳男性）など、懐かしむ声が続く。

「サブマリン投法」の山田久志（阪急）は9位に入った。「華麗なアンダースローに魅了されていたが、パ・リーグの試合はなかなか放映されない時代。日本シリーズを夢中で見ました」（神奈川、60歳女性）

そして何と言っても、伝説の沢村栄治（巨人）。生で見たことのない人がほとんどのはずだが、4位に食い込んだ。「速球のスピードを測ってみたい。米打者を空振りさせた『懸河（けんが）のごときドロップ』は、現在の球種なら何なのか知りたい」（神奈川、86歳男性）。茨城の男性（77）は「草薙球場（静岡県）での米代表への沢村の快投を実際に見た父親の話が忘れられない」という。

■「野茂は不言実行の人」

往年の名投手について、スポーツジャーナリストの二宮清純さん（61）に分析してもらった。リストに載った投手たちへの取材経験も豊富で、隠れたエピソードも聞かせてもらった。

まず1位の野茂から。「すごいのはメジャーリーグへの道を作ったこと。野茂の歩いたところが道になった。不言実行の生き様が評価されたのでしょう」

近鉄1年目のキャンプでのインタビュー。太平洋が見える宮崎県のキャンプの宿舎で、練習が終わったあと、海を見ながら、「僕のやりたい野球はこの向こうにあるんですよね」と言っていたのを覚えている。

渡米前に、あるメジャー関係者から「君は英語をしゃべれるのか？」と言われ、「英語を覚えるためにいくわけじゃない。野球をしに行くんです」と答えたのを見て、「これは成功する」と確信したという。

＊

2位の金田は、いいプレーをするには、いいガソリン（食事）が必要が持論。「自腹でステーキなどをおごり、キャンプでは部屋で鍋をやり後輩を招いていたそうです」。川上哲治・元巨人監督から「金田の功績は、食の大切さを巨人に持ち込んだこと。おかげでV9を達成できた」と聞かされた。

そして、3位の江夏。力と技と頭の三つがそろっていたという。若いときは三振中心の「力」の投球、晩年は凡打に打ち取る「技」の投球に変化した。

キャンプでブルペンに審判を立たせるとき、ボールを半個ずつ、ずらしていく。「ここストライクか？」「ここまでとるんやな？」。審判にそう確認してストライクゾーンを広げていったという。「あんなに頭のいい人、見たことない。心理学者のようでした」

沢村については、草薙球場での試合を8ミリに撮った人がいて、テレビ局でスピード解析したことがあるという。「140キロ前後だった。当時の平均球速は120キロ台だったので、今で言うと160キロ以上の感覚ではないでしょうか」

沢村の球をずっと受けていたキャッチャーに会いに行った。「だれが速いって、栄ちゃんぐらい速いのは、いない。これが何よりの証拠や」と、腫れ上がった左手を見せてくれた。右手と左手で全然大きさが違っていた。

トップ10圏外で、印象に残った投手を挙げてもらった。15位の杉下茂（中日）のフォークは「魔球」だった。「日本シリーズでも、フォークは1球、見せ球で放っただけで、相手打者を驚かせたそうです」。「これは誰も打てないから面白くないんだよ」と話していたという。

杉下は、フォークを村山、村田、佐々木主浩（横浜）らに伝授した。その佐々木は13位に入った。「彼のフォークは2、3種類はあった。大魔神のイメージもあり、威圧感があった」

選択肢にない選手から、江川卓（巨人）を挙げた。「高校2年の秋が最も速い『ビンテージ』の年でした」。さらに、八百長疑惑の「黒い霧事件」で永久追放になった森安敏明（東映）と、池永正明（西鉄）＝後に処分解除。「事件がなければ、それぞれ200勝と300勝はしていたでしょう。森安は、サイドスローで猛禽（もうきん）のように襲いかかってくるボールだった。黒い霧に汚染されず、彼らが長くいたら、プロ野球の歴史は変わっていたでしょう」＝選手は敬称略（佐藤陽）

＜調査の方法＞　1月中旬、1302人が回答。150勝以上か200セーブ以上（日米通算含む）をあげた投手に、野球殿堂入りの人を加えた。11位以下は（11）桑田真澄（12）津田恒実（13）佐々木主浩（14）杉浦忠（15）杉下茂と続く。

◆来週のこのページは、「池井戸潤が撮る　日本の工場」を掲載します。「今こそ！」のアンケートはhttp://t.asahi.com/berankで実施中。テーマは「今こそ！聴きたい　『桜ソング』」。